

琉球大学学術リポジトリ

マカカ属にみられる社会集団の構成に変異をもたらす生息環境の多様性

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学21世紀プログラム 公開日: 2007-06-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 早石, 周平, Hayaishi, Shuhei メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/682

PE-19 マカカ属にみられる社会集団の構成に変異をもたらす生息環境の多様性
(The social composition of genus *Macaca* and the habitat diversity)

早石周平 (Shuhei Hayaishi)

琉球大学大学教育センター

昼行性霊長類の多くは、群で生活している。群の大きさは、生息地の餌の資源量と分布様式に依存し、群内のオス数は、群間競争が高くなるほど、大きくなる。屋久島では、海岸林でのニホンザル *Macaca fuscata* の生息密度は、照葉樹林、針葉樹林に比べて、3倍である。これは餌資源の量に対応することが判明している。海岸林では群間競争が高く、群内のオス割合が高い。上部の森林では、群間競争が低く、群内のオス割合が低いことが、最近分かってきた。屋久島は面積約 500km²の小さな島であるが、植物の垂直分布による生息環境の違いに応じ、群の社会構成が異なる。そこで、*M. fuscata* と同属で、植物の垂直分布の見られる台湾島に生息するタイワンザル *M. cyclopis* との比較研究を計画した。台湾島は面積約 36000km²、標高 4000m 近い玉山を擁し、亜熱帯から冷温帯まで植物の垂直分布が見られる。本島一円に *M. cyclopis* は生息し、群密度、群頭数に地域変異が報告されている。屋久島と同じく群密度や社会構成の変異がみられるかどうか、調べた。

2006年11月30日と12月1日に、屏東縣の浸水營古道(調査区1、標高200-1400m: 照葉樹林)、2006年12月4日から6日に、高雄縣の楠梓仙溪林道(調査区2、標高1700-2200m: 照葉樹林と針葉樹林)を調査路とし、*M. cyclopis* の目視、音声情報、路上の糞を記録した。目視、音声の確認時には、調査路から垂直の方向に距離を目測して記録した。調査者に対する反応を、「無視」、「脅え」、「逃走」に三区別して記録した。複数頭を目視したときには、性年齢クラスを推定して記録した。いずれの情報も時刻と位置を記録した。位置記録には、GPS60 (Garmin 社製)を用いた。*M. cyclopis* の群密度は、新鮮な糞の個数から推定した。推定には、調査区1では道幅2m、群頭数を30頭、調査区2では5m、7.8頭とし、一頭あたり一日3回の糞をすると仮定した。

調査の結果、糞の発見頻度、群密度ともに、低地の調査区1 (0.64/km, 3.5 群/km²)にくらべ、高地の調査区2 (0.84/km, 7.2 群/km²)で高かった。*M. cyclopis* の調査路からの発見距離は2調査区合わせて、52.6±36.2m (mean±SD)であり、調査区1 (N=2)と調査区2 (N=14)のあいだに、有意な違いはなかった(Mann-Whitney test, U = 17.5, P = 0.63)。*M. cyclopis* の反応は2調査区合わせて、無視1回、脅え12回、逃走3回であった。調査区2では、最大で1群あたり9頭を数えた。新鮮な糞の個数から算出した生息密度は、先行研究に示された楠溪林道の生息密度、3.22 群/km (針葉樹林)、0.75 群/km (照葉樹林)のいずれに比べても高かった。仮定した頭数は大きく外れていないので、一日の糞回数について、飼育下で観察して、再計算する必要がある。今回の調査で示唆された先行研究との発見数の違いを含め、屋久島と異なり、標高帯間の発見率と植物の垂直分布との関係の逆転の原因を明らかにするために、社会構成、生息密度、植生、果実生産量について調査を行い、また地域間比較のために地点を増やす必要がある。